

続・ 珈琲の思い出 35

鈴木優子

「ダメよ。」

和樹からのメールが親しみのこもったタメ口だったので、つい優子も同じように返事を
してしまふ。

「どうして?会いたいのにな?」

「えっ・・・?そうなの?和樹さん、嬉しい!実は・・・私もよ、すぐ会いたい!」

「じゃ、なおさらおいでよ、今すぐに!」

「ごめんなさい、すぐ行きたいんだけど、うちは主人と娘たちもいるし・・・うーん」

「あゝあ、がっかりだね、ションボーン」
「がっかりした顔の絵文字が送られてきて、思わず
優子は、ふふふ、と笑ってしまった。

「あ、でも午後からなら少し時間が取れるかも。おうちには行かれないけど、コーヒーで
も飲みに行かない?」

「いいよーどこに行く??」

「じゃあ、S町の裏通りに小さなカフェがあるの、そこに15時はどう?」

「OK!やったー!楽しみだ!」(続く)